

矢部 隆 さん

愛知学泉大学現代マネジメント学部教授

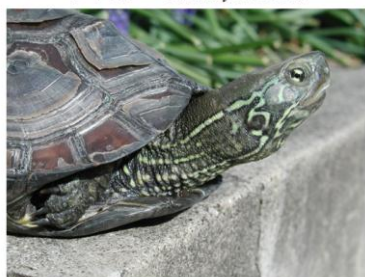


私たちは、かつて身近ないきものであった在来のカメの生態について、多くのことを知りません。それは、カメの研究者層がとても薄く、解明されていないことが多いためなのですが、そのような中でも矢部先生は積極的に研究を続けられています。今回は、愛知県豊田市にある愛知学泉大学のキャンパスにお邪魔して、カメのお話を聞かせていただきました。

◆カメの研究者になられたきっかけについて教えてください。

こどもの頃、私は岡山县内の牧場で育ったので、周りに自然がいっぱいあってカメはよく目にしました。小学4年生の初夏でしたが、農業試験所とか酪農試験所付きの獣医だった父が、なぜかその時カメを拾ってきて「飼うか？」って聞いてくれました。「うん、飼う。」と二つ返事で飼い始めたのが、カメとのふれあいの始まりでした。そのカメは、まだ年をとってなくて黒化していないクサガメのオスでした。外にタライを置いて、日よけや日向

クサガメ *Chinemys reevesii*



ぼっここの石を置いたりして飼い始めましたが、結局大雨のときにオーバーフローして逃げてしまいました。その時ワンワン大泣きしたのを今でも覚えています。

その後、カメは自分で捕まえに行くようになりました。昔はまだ野生のカメが多く生息していました。でも、池で日向ぼっこしているカメを捕まえるのは無理でした。カメは動きが遅いといわれていますが、実は体温があがると動きが早いですからね。川を上から見て、泳いでいるのがいたら捕まえに行きました。当時、私の家族は岡山县北部の津山盆地、かつて美作一宮のあったところに住んでいました。父が拾ってきてくれたことがきっかけとなり、妙にカメにはまってしまいましたが、じっと観察したり、夏休みの自由研究ではカメばかり扱っていました。

小学6年生の時に、自由研究でカメを題材にして、津山市で賞をもらい、さらに岡山县の大会に出ました。その時、父方の祖父母が応援にきてくれました。一緒に嬉しそうに写っている記念写真が残っています（笑）。「カメの行動を詳しく観察した」なんてアサガオの自由研究みたいにはマニュアルがないから、評価する先生の中にも妙な顔をしていた方

がおられたのを覚えています。絵を描くときもみんなカメで、それをいろいろ変形させて図画を描いていました。

中学校ではスポーツもやりたかったのですが、やはり科学クラブに入り、生物班でカメの生態の研究に励みました。当時からカメの動きを見て、オス、メスの違いを見極めたいという気持ちがありました。まず取りかかったのが、カメを捕まえてきてオスは黄色、メスは赤のペンキで背中に番号を振り、他の部員に協力してもらって池の周りに散らばり、一斉にカメを放し、池の地図上にカメの影跡図を描こうとしました。しかし、ため池の水が濁っていて、数秒でカメが見えなくなり、みんな呆然とした記憶があります（笑）。

科学クラブには物理班もあって、カメの追跡調査を行うために電波発信機を作ってもらいました。でも、電波発信機を名刺入れのようなケースに入れてテープでぐるぐる巻きにしたことや、単3の電池を使ったため重すぎたことがカメの邪魔になるということで、駄目になりました。でも、その後いろいろ試行錯誤したこともあり、大学に入ってから、一個2万円もする電波発信機をつけたり、甲羅の縁に穴をあけて捕獲しては逃がすということをし繰り返して個体識別をし行動解析をすることができるようになりました。他には、カメの死骸を拾ってきて、骨格標本を組み直したりするようなことも試みました。

カメをたくさん捕獲する方法は小学生の頃に体得しましたが、冬期に銅山跡地の池に潜って小さな穴があいているところから捕りました。私は本当は民俗学的なところにも手を出したくて、考古学の報告書をこれまで4本作成しています。カメを民俗学的に研究すると、人間とカメとの距離感がわかります。小学生の頃から、少しずつ野生のカメを実体験として理解するようになり、それは本当に幸せだったと思います。なぜなら、今カメの研究をしている学生でも院生でも、野生のカメを捕ったという経験がある子がいないのです。

◆日本最長老のアカミミガメを飼育されているって、素敵ですね。

高校では、ボート部に所属していましたが、あまり熱心にやりすぎて、高校2年の時に胃潰瘍になってしまいました。インターハイの予選は勝ったのですが、本大会には行けませんでした。最終的に部活をやめなければならなくなって、失意の状態にあるときに、岡山の「天満屋」というデパートの屋上で、ミシシippiaアカミミガメの子供（ミドリガメ）を2匹買いました。そのカメは17歳のときに買って、もう30数年飼育しています。正確に年齢が記録できているものでは日本で最長老かもしれません。まだまだ元気で、メスに向かって求愛しています（笑）。高校生の時、大学の進路について、生物学かインド哲学かどちらを選択するのか迷いましたが、当時の体育の先生から河合雅雄先生の「森林がサルを生んだ」という本を見せて頂いて、個体識別をして動物を追いかけることがこんなに面白いんだということに興味を深まり、生物学

ミシシippiaアカミミガメ
Trachemys scripta elegans



の方を志すことになりました。

その後、名古屋大学に進学しましたが、教養課程のあいだ、下宿生活でカメを飼育できなかったのも、ウォッチング程度のことをして、動物園とか水族館に良く足を運びました。研究室では DNA のことしか研究できなかったのも、名古屋大学理学部の大学院には進まないという条件付きで、退官間近な先生のもとで好きな研究をさせてもらいました。実際には、ドングリの専門家の広木詔三先生の手解きを受けさせていただきました。広木先生とは生態学のことたくさん話しましたが、進化の話をするのにアリストテレスの話からするような方で、私もそういうのが好きでしたので気があったと思います。大学3年生の頃から先行して研究を始めようということで、余暇を利用して三重県桑名郡多度町（現桑名市多度町）の山の方で、カメの野外研究を始めました。基本的には河合雅雄先生のサル学の本や京都大学の本を読んで、動物の社会を調べるには個体識別が重要だということで、山奥の廃屋を借りて、そこに寝泊まりしながらフィールドを歩き回り、イシガメを捕まえてはいろいろ測定をしてマーキングをするという生態研究を始めました。マーキングはカメの甲羅のひさしのところに位置と数を違えて穴をあけるという手法でした。サル学の人たちが顔を見て個体識別して、サルの動き、個体間関係を観察するというのにだいぶ懂れているところがありました。カメは単独生活者だったのであまり上手くいきませんが、個体ごとの行動を見るのにはすごく良かったです。

◆カメはもの凄い能力をもっていますね。

大学院への進学に際し、当時「カメの生態は前例がないし、データがないから駄目だ」と言われることが多く、カメが分布している西日本の大学を中心に何カ所もまわりました。最終的にカメの研究をやってもいいと言ってくれたのが金沢大学と東京都立大学（現首都大学東京）で、今度は東京しかないと思い東京都立大学に進学しました。地図をじっと見て、三浦半島や房総半島にはカメがいるだろうと思い現地を回りましたが、田んぼの地図記号があっても既に宅地になっていたり、ため池の地図記号があっても跡形もなくなっていたりということばかりでした。日本の生態学の確立に貢献された指導教官の宮下和喜先生に相談して、2週間に一度のセミナーの時には東京に戻るという約束で、三重県での調査を継続することにしました。安上がりにするため、昼間の高速バスだと都市間往復に学割が利いて、片道 4,000 円だったので、三重県から通いました。以前、多度町史の自然編を編纂する際、自然環境調査を行う機会を頂きましたが、同町は東半分が揖斐川の輪中地域の低地で、西半分が養老山地の南端という面白い地域です。東半分の低地にはアカミミガメ、クサガメが多く、丘陵地とか山地にはイシガメが多く生息しています。博士課程の仕事として手をつけたのがイシガメでした。水田の間をカメを探して歩き回ったり、谷川をさかのぼったりして、カメを捕まえては計測してまた放すという繰り返しでした。何回も捕まえればマッピングの

ニホンイシガメ *Mauremys japonica*



情報が蓄積できますし、移動パターンなどがわかります。あるカメは毎年夏に同じ場所で捕まるのですが、冬になるとトコトコ歩いて山を越えて池に行きます。池とその場所をずっと往復しているのです。距離は 500m くらいですが、夏場捕獲できる場所で腹這いになると絶対池の場所なんてわかりません。間に山があるし、シダとかマツとかが生えているので見えません。でも次の夏には必ず同じ場所に戻ってくる。別のカメは毎年別の場所に出没して、別の場所を往復している。

次に出てくる疑問としてカメは何をもって方向を認識しているのかということです。候補として考えられるのは、太陽コンパス、匂い勾配、磁気コンパスなどです。外国のいくつかのカメは、これらを使う能力があるということが実験的に分かっています。例えば太陽コンパスを使う種だと、ある方向に動機づけをさせておいて、時間を6時間ずらしてやると、90° 間違えた方向に動きます。多度のカメたちの移動ルートが気になりますが、私が最初考えていたことは、田んぼにいるカメたちは歩き回って稲刈りが始まる前の水を落とした時、田んぼに繋がる農業用水路を伝い谷川を通過して上流に向かって遡り、池に移動しているのではないかということでした。しかし調査をしている中で、水路を使わないでまっすぐ尾根越えをしている個体が見つかりました。何を使っているのか分からないのですが、そもそも位置関係を知らなければだめなはずです。きっと、若い時には知らなくても、近くの水辺で越冬して畦や田んぼと行ったり来たりする中で、徐々に行動圏が広がった時に池を見つけて、池があることを知ったら頭の中で認知地図を描いて、夏は田んぼで、冬は池で越冬しようというふうに行っているんじゃないかと考えています。しばらくは谷川をたどっていたのでしょうし、実際に電波発信機でそういう行動をしている個体を追跡したことがあります。ある個体は最短距離をいける方向を覚えるという学習をしたのではないのでしょうか。だんだん池を見つけたり、短い距離を獲得していったんじゃないですかね。以前1度の調査で20個の発信器を装着して20個体のカメを同時に追跡したことがありますが、あれば地獄でした。昔は体力があったからできましたが、今同じ調査をやれと言われたらバイトを雇わないと苦しいですね(笑)。

ただ、川があって、谷川が流れていて、ため池もあり、畑とか里山とかがある、カメのハビタットとして多様性に富んだ場所ですが、そんな場所も今では電力会社が送電線の建設のための作業道をつくったために分断されてしまいました。オーバードクターの時代で食べるのに困っていて、工事をやめてくれとか、やるならアンダーパス付けてくれとか言えたかもしれませんが、それも対応できずに結局道ができてしまいました。群れをつくる野犬が増えカメが食べられてしまうような、急速な環境の悪化も手伝って、かつて400~500いたと思われる個体群の数は、だんだん減少し、数十しかとれなくなってしまうました。今も時々立ち寄りますが、もう放棄してしまった感じでしょうか。あるいは道に出てくるのが怖くなったから、池に留まっているのかもしれない。

近年、全国的な問題として過疎化・高齢化が進展し耕作放棄地が増え、山の近くでは植生遷移がどんどん進んで、元々田んぼだったところが乾燥化しています。本来、田んぼは

田おこした方が生き物はいっぱい増えますが、耕作放棄により多くの生き物の生息するチャンスが奪われています。私の主張は、山のため池を放棄するなら土手を切るべきだし、田んぼを放棄するなら畦を切るべきということです。そうでないと、カメとかカエルが打撃受けます。

そうこうしているうちに、4年目に愛知学泉大学からうちの大学に来ないかと声をかけて頂きました。愛知学泉大学は社会科学系ですが、生態学とか地域環境論とかの授業を担当することとなり、社会学と環境問題は切り離せないと感じました。本大学に就職してから豊田市内に住むことになり、矢作川流域を中心にカメを調べ始めました。豊田市や岡崎市では地域住民の環境意識が結構高く、将来レッドデータブックを整備するために、市からの委託で学生の卒業研究も兼ねてカメの生息分布調査をさせていただきました。現在、豊田市史の自然編を刊行しようと、合併後の広大な豊田市の生物調査を行っていて、再来年度くらいまでに完成予定です。市史の会議をするときに、必ず一人環境政策課からオブザーバーが来て、データは共有で使うことにし、その課ではデータを持ち帰ってGISで処理できるようにしています。市史が発刊されたあとには、多分そのデータを使ってレッドリストをつくる意思があるでしょう。岡崎市は一昨年度に作業を開始し、今年度でレッドデータブックを作ろうとしています。私は、豊田市、岡崎市のどちらにも爬虫類担当として参加しています。

動物愛護の観点からもカメを見直さないといけないという動きもあって、岡崎市は動物行政推進協議会をつくって、岡崎市東公園の動物園のところに「アニモ」という動物総合センターを立ち上げ運営しています。窓口には獣医たちや自然環境の政策の職員、農政の職員を配置して、動物問題で市民が来られたらワンストップで対応しています。豊田市でも同様の動きがあると聞いています。私は、岡崎市の動物行政推進協議会の会長をやらせてもらっていて、カメについても動物愛護の観点から関わっています。昨年名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催されたことをきっかけに、名古屋市ではため池のトゲスッポンやカミツキガメといった外来のカメを捕獲する取組を展開していて、捕獲された外来のカメは私の方で引き取らせてもらっています。また名古屋市では名古屋生物多様性センターを立ち上げて、私は月に2回センター長として出かけることになっています。名古屋市も都市部の水系を持っていて、特に天白区、守山区、千種区などの丘陵地にはまだ自然が残っているため、真剣に保全活動を行わなければいけないと思っています。カメの分布パターンや生息状況をみて、その関連で外来生物を見つけたら処分するという仕事が増えています。

私自身、研究者の一人として、かつてイシガメの生活史を追跡調査したようにクサガメについても同様の調査を行い、比較生態をやりたいと思っています。また、カメの求愛行動のパターンもバリエーションがあるので捕まえてきて研究室内で行動解析をしたいのですが、今はそれどころじゃなくて野外での現況調査が多くなっています。在来のカメを守るためにエコトーンを中心としたビオトープの整備をしたり、外来生物を駆除したりとい

う流れができれば、私がいなくてもよくなり、またファール的な研究に戻れるのですが。研究テーマの一つとして、カメの卵は温度によって性別が決まるということも実験したいと思っています。

◆生物多様性について、また日本在来のカメの危機について、お話し下さい。

○生物多様性について

生物多様性について話すとき、カメの話をするよりもまずは一般論から話しています。生物多様性という言葉は誤訳ではないですけど、あまりいい翻訳とは思っていません。Biodiversity という言葉は、「Bio」「di」「versity」の3つに分けられます。「Bio」は Biological、つまり生物学、いきものことです。「di」というのは何かを2つに分けることで、「versity」は verse (vert の形容詞形) のことで動きを表します。たとえば reverse とか converse とかがありますが、diverse というのは分岐、分化のことで、その意味は辞書の2番目に書かれています。1番目は多様性。おそらく辞書をつかわなければ、「生物多様性」を英訳すると Biological Variety とかになると思うのです。Biodiversity というのは、進化の帰結なので、そのことを押さえておかないと、イシガメとスッポンしかいない池にアカミミガメを放したら多様だからいいよと考えちゃうのです。進化の枝別れの先に今の種があって、種が枝別れた先にイシガメやスッポンがいるという歴史性を持った言葉でないといけません。多様性とした瞬間に、ただたくさんいればいいということになってしまう。種の分岐ということをしっかり考えなければいけません。本当はこれを視覚的にあらわせる模型をつくりたいのですが……。イメージはありますが、時間分岐をあらわせる模型やCGがなかなか作れなくて困っています。

○日本在来のカメの危機について

日本のカメの危機は、5つのカテゴリーにわけられます。①開発行為による生活環境の悪化、②漁獲活動や農業活動による負傷・事故死、③水質の悪化、④乱獲、⑤外来生物の増加による影響です。

順番に見ていきますと、開発行為は、護岸工事や道路の敷設によってカメの集団越冬地が一網打尽にされてしまうことがあります。今まで河岸段丘や後背湿地などの昔 Wetland だった場所を水田として利用してきましたが、耕作放棄と植生遷移によって乾燥化し、Dryland になってきていて、カメとか貝類の生息にも影響が出ています。

外来生物の増加による影響は、ウシガエルが子ガメを食べたり、アライグマが親ガメを食べってしまうこともあります。外来カメ類の在来カメ類への影響もあります。具体的には、種間競合、生態系・食物連鎖のかく乱、遺伝子汚染といったところです。種間競合というのは、種の置換が起こることです。例えば、岡崎のため池のアカミミガメが増えて、イシガメの割合が減っていて、市街地ではほとんどアカミミガメばかりという現状があります。日本自然保護協会が2003年におこなった「日本全国カメさがし」では、捕獲された

5,968頭のうち6割以上がアカミミガメでした。

ワニガメ *Macrolemys temminckii*



生態系・食物連鎖のかく乱ですが、愛知県で最近よく見つかるワニガメやカミツキガメは非常に大食いです。巨大なワニガメは大きなコイを同じ水槽に入れておくと一晩で頬骨と浮袋を残して平らげてしまうほどなのです。

他方、遺伝子汚染が非常に厄介です。普通、種の間では生殖隔離が起こっています。鍵と錠の関係みたいに、普通は交配はできません。人為的にアイガモやラバ、レオポンなどを交配で

生み出していますが、その子は繁殖能力を持ちません。もちろんハリヨやイトヨのような例外はありますけれど。でも、カメは特殊で、種間じゃなくて属間雑種を生じることがあります。しかも、子どもも繁殖能力を持っています。イシガメ科イシガメ属のカメとイシガメ科クサガメ属のカメが交雑して雑種をつくり、その子供を残すことができるのです。これは、妙なたとえ方をすると、ヒト科ヒト属のヒトと、ヒト科パン属のチンパンジーが交雑して、さらに子供を作れるということなのです。じゃあカメの雑種が子供を残せるなら、新たな種ができるし生物多様性も増えると考えがちなのですが、そういう考えは大間違いです。例えばイシガメとクサガメを交雑させたらイシガメとクサガメの両方の遺伝子を持つものだけ生まれてきます。それ同士を交雑させたらどうなるか？イシガメになる

ニホンイシガメ×クサガメ



のもいれば、継続してイシガメとクサガメの両方の遺伝子を持つものだったり、クサガメになるものもあります。実際には、カメの染色体は $2n=52$ なので、イシガメとクサガメの交雑個体は $2^{26}=67108864$ 通りの染色体の組合せができてきます。形態的なまとまりがまったくなくなります。これは新しい種になったとはいえないんです(図1)。さらにカメには精子貯蔵と遅延受精という特殊な能力があり、一回の交尾で数年間雑種を生み続けることができます。名古屋市内のため池でもクサガメとハナガメの雑種、イシガメとハナガメの雑種が見つかっています。

ニホンイシガメとクサガメを $2n=2$ と単純化した場合の例

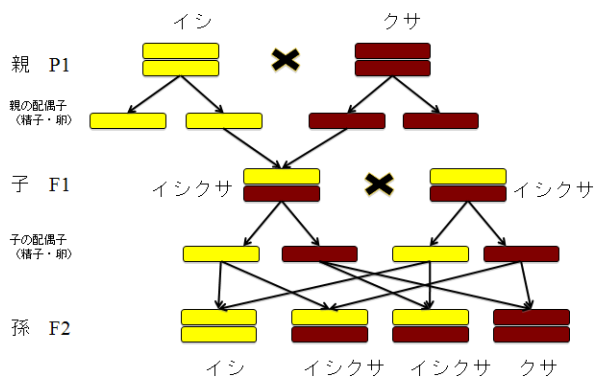
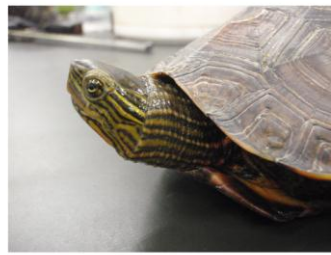


図1 イシガメとクサガメの交雑例

クサガメ × ハナガメ



ニホンイシガメ × ハナガメ



◆矢部先生の研究でわかってきたことを教えてください。

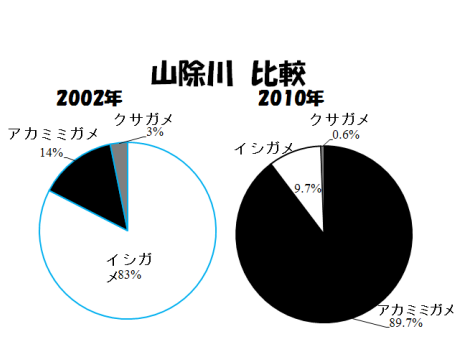


図1 山除川の比較

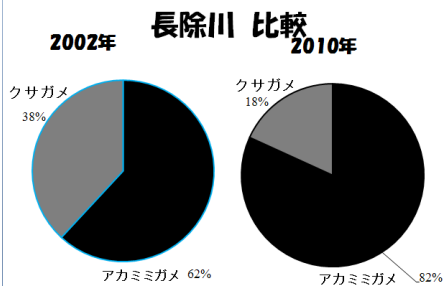


図2 長除川の比較

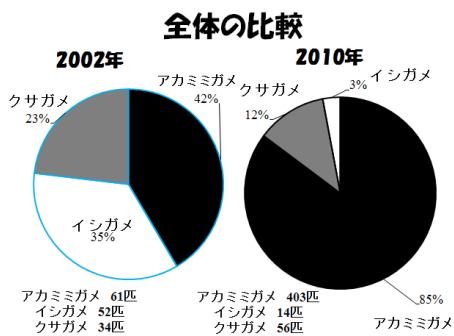


図3 全体の比較

揖斐川の支流に山除川、長除川がありますが、2002年と2010年にトラップを仕掛けてカメの捕獲をしました。10個くらい仕掛けて2日間捕獲しましたが、山除川では2002年にイシガメが83%、アカミミガメが14%、残り3%がクサガメでした。しかし、2010年には89.7%がアカミミガメ、イシガメが9.7%、クサガメが0.6%まで減少してしまった(図1)。

長除川は2002年にアカミミガメが62%でしたが、クサガメは38%いました。2010年にはアカミミガメが82%を占め、クサガメは18%まで落ち込んだのです(図2)。合わせて全体でみると、2002年にアカミミガメ42%が2010年には85%に、イシガメ35%は2010年に14%に、クサガメ23%が2010年には12%に減りました(図3)。明らかにアカミミガメが増えています。どのカメもある程度成熟したものは年2回産卵します。ヘビなどはおなかに卵をためられますが、カメは甲羅があるからためられないのです。イシガメは1回につき6~7個を生むのに対し、クサガメは10個生み、アカミミガメは15個くらい生みます。子ガメの大きさとか行動はそれほど変わらないので、捕食圧もそれほど変わりません。それでアカミミガメが増えている場所で、在来カメの絶対数がどんどん減っているのは間違いありません。外来ガメの侵入が著しいです。私が想像していたスピードよりも早くどんどんアカミミガメが増殖しています。

私は最近、「カメは分解者だ！」ってしきりに言っています。今までカメが自然の中で何をやっている

のか研究されてこなかったのですが、直接観察や糞分析をすることで、様々なものを食べていることが分かりました。アナグマやカラスなどの動物の死骸が落ちていたらパクパク食べていますし、フナとかの死骸が浮いていたらそれも食べる。ちょっと山に入れば、ヤマモモとかアケビが熟して落ちたものを食べています。ツユクサやハスなど生きた植物も積極的に食べますし、ミミズがいたらそれも食べます。浅瀬にモツゴやアメリカザリガニが追いつめられていたらそれも積極的に食べるのです。モノアラガイとかサカマキガイ、タニシなどの生きた貝も好きみたいです。動物も植物も食べるのですが、基本的に素早い動きができないものですから、拾い食いをするタイプであるということがわかってきました。分解者というのは教科書では有機物を無機物にするキノコやカビの仲間が紹介されていますが、私はそれだけじゃなくて、シロアリとかゲジゲジとかの土壌動物やエビ、カニ類、アサリとかの底生動物にも注目しなくちゃいけないと思うんです。カメもその中に入るのです。

◆中部地方の在来、外来のカメに関する課題解決のために、一般の市民、行政、研究者がそれぞれ何をすればいいかお話し下さい。

カメの研究者は層がとても薄く、調査がまだ行き届いてないところがありますが、中部地方では三重県の伊勢志摩地域、岐阜県的美濃地域、愛知県の三河地域にはイシガメが多く、広大な濃尾平野にはクサガメが多く分布していることは分かっています。研究者は今後定量的な、あるいは変化を追えるような研究を進めるべきだと思います。

DNA やたんぱく質の分析の仕事に素人が出る幕はありませんが、自然史とか博物史の **Natural History** を行うときは、研究者の出番です。しかし、いくら見る目が正しいからといっても所詮 1 人とか 2 人です。とても見る数が足りません。調査には意義があるということアピールし、行政や市民を巻き込んで、手と足と目の数を増やしていきたいと思えます。研究者もカメといういきものの生き方を周知できるように努力することが重要です。まずはカメのことを知ってもえらえるように普及啓発することから始めることだと思います。

それを受けて市民ということになりますが、東海地方を中心とした地域は首都圏や京阪神に比べると自然を知ろうという人が少ない気がします。近畿だと大阪市に自然史博物館があつたり、兵庫や千葉にも拠点となる施設があつて **Natural History** のデータを蓄積していますが、豊橋市に市レベルのものがあつても、愛知県には県レベルの自然史博物館がありません。

愛知県はものづくりの県だと言いますが、なぜそんなにもものづくりができるのかというと、自然が豊かで、食べ物が豊富だからです。自然の恩恵を感じながらものづくりに邁進するならいいのですが、あまりにもものづくりばかりになり過ぎて、それを保証してくれる自然の豊かさ、農業生産や漁業生産の豊かさを忘れていています。ですから、心に余裕を持って、自分たちの居場所である自然環境にもう一度きちんと目を向けて欲しいのです。目

を向けて、動物の各論を知る。例えばカメですと卵を産んだり、日向ぼっこをするのに水辺の河原とか里山とかが必要です。越冬したり、逃げ場所、採餌場所とするのに水の場所がある。移動するにはエコトーンといわれる場所を確保しなければいけません。そういう場所の意味と価値を認めるように知的レベル、文化レベルの高い市民になっていただきたいと思います。見ることにより、その状態が良いか悪いかが分かれば、何をしたらいいのか分かると思います。今までのようにビオトープのビチャビチャしたところが銭にならないからコンクリートで固めて道にしようとか、そういう発想は長い目で見ると人間の居住環境を悪化させていることになるということを確認していただきたいと思います。

COP10 が一つの契機となって、ようやく名古屋市で生物多様性センターができたり、少しずつ愛知ターゲットを実現しようとする動きが出てきて、これを機に環境のことを知る、まずは知ることから始めて欲しいと思います。目先のことでは、環境を浄化したり心を癒したりしてくれる効果があるということを確認して欲しいし、長期的にみれば捨てられたような土地にいる見向きもされないような動物でも、生物多様性の結果としての遺伝子資源になり得るということも含めて、子孫に残さなければいけないというくらいの意識を持って、市民はそれを目標にして活動して欲しいと思います。

活動の視点から、行政のコーディネイト機能はとても重要だと思います。行政というのは法律に基づいて何をやっていいのか、いけないのかということ把握している集団だと思いますし、民間団体や大学、研究者についていろんな情報を得ています。それを生かして積極的にコーディネイトする仕事を行政には期待したいと思います。場合によっては拠点が必要かもしれませんし、もしかしたら生物多様性センターみたいなものかもしれません。あるいは、ビジターセンター的な拠点整備が必要かもしれません。できたら博物館みたいなものがあるといいのですが、それだけではなくて愛知県内の各地にある博物館やセンターをネットワーク化して、総合的な情報を集めることも必要だと思います。

もう一つ、私くらいの年代の学者では、もう昆虫採集したり押し葉の標本をつくったりしません。でも私たちより前の世代の学者ですと、まだまだ高度経済成長期以前の自然がいっぱい残っているときに、丹念に標本をつくっています。少しずつ世代交代する中で、標本が捨てられたりしています。そういう標本をちゃんと引き取って、ラベルの確認とかをして、標本として取っておきたいと思います。標本があれば、今と照らし合わせることもできますし、当時何が生えていたのかを知ることができます。コンサルタントの機能を果たすことができます。失われていく知識と標本をなんとか保存していきたい、そう思って名古屋でも活動しようと考えています。

また、中部地方にはカメが多く分布しているという認識を持ってもらいたいと思います。中部地方から東に行くとカメの分布は少なくなります。天竜川辺りが境界だと思いますが、一度天竜川をずっと遡って調べてみたいという夢があります。何とか境界を明らかにしたいのです。三河や知多地域にはイシガメ、濃尾地域にはクサガメが多いというような面白さや、愛すべき生き物というのは陸域と水域のエコトーンを連続的に使っているというこ

とを知って貰いたい。カメが健全に生活していれば、陸域も水域もエコトーンも全部健全だということが分かります。性比が偏っていたり、若い個体がほとんどいなかったりするならば、何かおかしいのです。そういう生き物であることを知っていただいて、次に分布の端に位置している希少な中部地方のカメをどう保全するのかということについて、問題を一つ一つ解決していくということになると思います。ハビタットの破壊というのはある意味高度経済成長のときに終わっているのです、次は工事をしないことではなくて、コンクリートを剥がした時にどういう環境をつくるかということをしつこく進めるべきだと思います。

外来種については、駆除やむなしというコンセンサスができてきているので、後はどうやって駆除するのかだと思います。昔は10日かけて200頭前後くらいしか取れなかったのに、いまなら罠をかけて2日でアカミミガメが400頭位捕れてしまう。そんな現状を考えると、市民の人たちにも汗を流していただいて、アカミミガメ、ウシガエルとかの外来生物を駆除するシステムを作らなければいけません。地元の自然を知って、地元の生き物を愛するという観点から地域の人たちには参画してもらいたいし、捕ってしまった動物の処分は行政にバックアップしてもらいたいと思います。それから、動物愛護関係になるかもしれませんが、カメたちの危機の原因の一つにペットの乱獲があります。インターネットオークションでカメを衣装ケース1杯5,000円から売っているという状況があります。イシガメとかクサガメですが、これも把握して規制をかけるならば規制をかけないと駄目だと思います。カメを飼うということ、ペット文化を否定するものではありません。ペットを飼い、人との距離を近くしているんなことが分かるということはありませんし、私自身そうして学んだので、ペットを飼うことは否定しません。ですが、入れない、捨てない、広げないといったようなルールもありますし、ごそっと売るのは文化じゃありません。“とりこ”と言われる人たちがごっそりカメのたまり場で捕っていったり、効率のいい罠でたくさん捕ってごそっと売ること何事だと思います。そういう捕り方をすると瞬く間に在来のものがいなくなります。ごそっと捕ったり売ったりした後、ほとんどは死なせていると思いますが、飼いきれなくて捨てる人も出てきます。そういうことが起こらないように、場合によっては罰則を含めてしばらく規制をしなければいけないと思います。

日本人はカメ好きだから、アカミミガメが世界の外来種ワースト100に入っているにもかかわらず、愛知県はカメの多い所で、かつ東の果てだということを知って欲しいのです。

2011.4.26 インタビュー

聞き手 田村 省二（中部生物多様性主流化チームリーダー、統括自然保護企画官）

酒井 久文（中部生物多様性主流化チーム、国立公園保全整備課課長補佐）

佐藤 祐一（中部生物多様性主流化チーム、名古屋自然保護官事務所自然保護官）

矢部 隆 (やべ たかし)

1963年、岡山県生まれ。1986年名古屋大学理学部生物学科卒業。1988年東京都立大学大学院理学研究科生物学専攻修士課程終了。1992年同博士課程単位取得後満期退学。1993年同学にて理学博士号取得。愛知大学、愛知学院大学、愛知教育大学非常勤講師を経て、現在、愛知学泉大学現代マネジメント学部教授。愛知県動物行政推進協議会委員長、なごや生物多様性センター センター長、名古屋市生物多様性保全協議会副委員長、岡崎市動物行政推進委員会会長を兼任。その他、愛知県移入種検討会委員、岐阜県レッドデータブック改訂調査検討委員会専門部会員、名古屋市レッドリスト選定委員、岡崎市自然環境調査検討委員など各種委員を務める。また、日本カメ自然誌研究会代表、紀伊半島野生動物研究会評議員、和亀保護の会技術アドバイザー、NPO法人カメネットワークジャパン理事などカメの保護活動に尽力している。